46　赤城信一について（第二報）

○上田智夫・小竹英夫・宮下舜一・吉田　信

函館戦争の終結後、赤城信一は東京に護送されついで久留米に幽囚されるが、明治三年許されて帰藩、四年に東京に出てくる。

開拓使公文録に、「浅草第六裏門通り高松凌雲同居　医生　赤城信一」とあるので、函館戦争における上司高松方に身を寄せたと思われるが、同居したかは判然としない。

明治新政府は北海道の開拓について、多くの東北人士を採用したが、赤城もこの為北海道に再び活躍の場を求めることになる。今回は、赤城が開拓使に職を求めてから、公立室蘭病院長を退職する迄について述べる。

明治五年二月、赤城信一は村岡県の医生朝倉恭三とともに開拓使御用掛を拝命し、月給五十両札幌詰の辞令を受けているが、本人は札幌には勤務していないと思われる。

またこの時、「南部精一門生六角謙三と申者、一等附属被仰付一行支度奉存候」と、六角謙三の採用について願い出ている。

赴任に当って乗船した開拓使附属汽船東京丸は、尻岸内沖で沈没、この時献身的に人員、機材の搬出に当り、平野弥十郎とともに金一万匹の慰労金を受けた。

開拓使御雇外国人エルドリッチが創設した「函館医学校」の通学生に、信一の弟赤城昌英の名が記載されているので、兄弟とも当時函館を本據としていたのであろう。なお、この学校の官費生九人の中に、六角謙三の弟健吉の名前も見出される。

開拓使は函館――札幌の交通路を最重要視して、開拓使兌換証券二百五十万円中の八十四万円の巨費を投入、札幌新道の建設に着手する。函館から森まで陸路、森から室蘭までを海上連絡、室蘭から再び陸路で苫小牧――千歳―札幌の開発大動脈とした。

この工事に動員された医員は、赤城のほか古川融、橋

口住正、菊池晩節、満田耕円など多数に及ぶが、古川融は赤城の前に一時室蘭病院の責任者となっている。

明治五年三月より同六年三月までの、工事中十三ケ所の病院の患者は、入院三百八十五人、外来二百六十四人、全癒二百三十人、死亡四十三人であった。

赤城信一が当初医員として、ついで病院長として在任した室蘭病院は、当初ホテルを買収使用していたが、明治九年には札幌通十一番地に新築移転している。その担当範囲は白老、登別から、伊達、有珠地方に及び、明治八年には有珠に出張病院を設けた。同じ八年には有珠地区を中心に間歇熱の大量発生があって患者千三百人に達して、キニーネの不足が深刻になり、赤城信一、杉山確、高橋玄寿が懸命に治療に当った。

この年（八年）の疾病について主なものを略記すれば、室蘭病院では消化器病二百四十七、間歇熱百三、梅毒百四十二、リュウマチ九十三、外傷八十九、有珠病院では間歇熱千三百四十六、消化器病百八、腫瘍五十四、皮膚病五十一などがあげられる。

明治十五年からは公立病院について、出港税から千五百円ずつ補助、当初の医員の月給は官費、薬価は一年間官与し五ケ年年賦で返済することとした。

この間信一は、明治十一年七月二十六日、開拓使病院奉職の履歴によって、医術開業免状の交付を受けている。

また、明治十二年十月には長女のタケ（竹子）が、登別入植の仙台白石藩主十三代片倉景光と結婚し、概地の開発に大きな功績を残すとともに、片倉家代々の教育、発展に寄与している。

この後も赤城信一は、当地域の医療に献身的に貢献するとともに、教育の向上にも寄与したが、道南地方に展開してきたキリスト教の信者となり、この故もあって一部港民の排斥するところとなって、公立室蘭病院長の職を失うこととなる。

（北海道医史学研究会）